

【平成28年度 明専スクール】

この素晴らしい活動に参加して

電 61 内堀 憲治



はじめに

学生時代、私はどちらかというところ引込み思案な性格で、自分の考えを人につけたり、議論すること、これは苦手だったし、社会に出るまでにその様な訓練を受けたことも無かった。しかし社会に出て30年、とにかく企業という団体での仕事は、チームとして、また組織として周りの仲間や、場合によっては競争相手ともスクラムを組んで大小の難関を乗り越えていかなければならないので、場合によっては激しい口論になるうとも自分の正しいと思う考えを主張し、一方では相手の意見を正しく理解し、あまたある解の中から最

適だと信じるものを探して決めていかなければならない。それは性格とか好き嫌いとかではなく、社会人としての必須のスキルである。

ではこのような私でも何とか一企業人として誇りを持って仕事ができているのは、間違いなく少しの勇気と議論するテクニックを身につけたからだと思う。ではそのスキルを身につけるためにはどうすれば良いのか。そのきっかけとして間違いなく私が学生時代に受けていれば社会人になって、もっと早くスタートダッシュが切れただろうと真に思うのがこの明専スクールの経験である。

そして今まで4回ほどこの明専スクールで生の学生と触れ合い、感じたことは、九州工大の学生は正にダイヤの原石であって、ちょっとした訓練を受ければ早くに各就職先で活躍できる人材が沢山いることである。

講座1日目 (第1部)

明専スクールは10月の第1部と11

月の第2部の2部構成になっている。

講座 (第1部) カリキュラム

2016. 10. 15 百周年中村記念館多目的ホール

敬称略

1. 尾家学長 高原明専会会長挨拶			
2. オリエンテーション	(元)日立製作所	徳丸 雅夫	(機249)
3. 明専~九州工大建学の歴史	明専スクール長	西尾 一政	(加47)
4. 企業と企業人	野村総合研究所	近野 泰	(電63)
5. 企業における実践(1)	安川電機	久保田 由美恵	(情知H3)
6. 企業における実践(2)	野村総合研究所	浅辺 公彦	(情知H4)
7. グループ討議の課題研究	TOTO	植木 幹	(電H1)

後にいただいた資料を見ても良くわかるが、第1部では各方面で活躍されているOB・OGのみなさんの会社での苦労や得られたスキル、考え、そして楽しさなどを存分に語られていて、聴講した学生のアンケートを見ても、社会人のイメージや心が構えが十分伝わったのではないだろうか。

私は遠方(栃木)ということもあつ

て、一番大変だと思われる準備と第1部の講義を免除させていただいており、とても申し訳ないと感じている。来年度は可能であれば第1部も参加したい。

グループ討議

第2部は2日間に亘り、先輩の講義の聴講と、「企業とは」という課題について学生のグループで議論して結論を出し、皆の前で発表し、PDCAを回す構成である。

当たり前であるが、殆ど初対面のメンバーと「企業とは」という私達社会人でも面食らう大きな課題を議論するのはとても難しいことであり、初日は、それなりの会話好きな学生がしゃべり続け、昔の私のようなもの静かな学生は黙って聞いている状況が続く。やや斜に構えているような学生も見受けられる。心の中で「ああ良い機会なのにもったいない」と思ってしまうのだが、1日目の区切りがついて夜になり、宴が始まってわいわいと話をするにつけて学生の緊張が少し解けて、泊組は仙水荘で大先輩からの更に深い話や明専トラップなどに興じながら、正に老若男女、九州工大の大先輩から学生が一



グループ討議の実践（発表の様子）

体となつていた姿を見ると、いい組織だなあとつくづく感じる。そして2日目になると陰では先生が学生にプレッシャーをかけた話も聞いたが、それまで寡黙だった学生も何か吹っ切れたのか、別人のように議論の輪に加わり、とても建設的な意見を述べていたし、相槌を打ちながら相手の話を熱心に聞いていた。正に弊社でいうところの理想的な「わいがや」が練り広げられていた。今まで過去にはかなり突っ込んだところまで補佐をしなければならぬこともあったが、今年はとてレベルが高いことは嬉しい誤算であった。私として

はちよつと暇をもて余したかもしれない。個人的に少し反省である。

そして中間と最終の2回の発表とQ&A、そして納富先輩（加48）と徳丸先輩（機二49）、その他スタッフの総括となったが、いつも私が感心するのはそれぞれ企業戦士として日々活躍されておられた、または現在活躍されている方々の言葉は非常に説得力があつて、時には私自身が勉強になる場面も多い。会社は違つても根っこにある考え方や行動は同じなのだということを確認すると共に、彼らの考えをシャワーのように浴びて何かを感じて社会人の仲間入りをする明専スクール参加学生はつくづく幸せ者だと思ふ。

■出張報告書

10月の第1部と12月の第2部の間にも先生やスタッフで考え出したすばらしい施策である、「出張報告書の添削」がある。これは学生が第1部の講義の中から一つを選び、植木さんを上司として期限までに出張報告書として提出させて、スタッフで分担して添削をするというものである。第1部と第2部の約1ヶ月の間にメールを使って添削するのである

が、なかなか通常の仕事の合間にきちんと添削するのは大変である。しかしダイヤの原石である学生に少しきつめの磨き（アドバイス）を行うと、再提出時には見違えるほどいい報告書になって返ってくることを知ってしまったと、会社の通常業務より楽しい場合も多く、大変であるが苦にならない。恐らく他のスタッフも同じ心境なのではなかったかと思うが、結果は学生の提出から採点して返却するまでのスタッフの添削のタイムラグが約半日ということだったそうだ。もちろん学生も報告書の書き方のコツを掴んだ筈であり、社会人となつてからの大きなアドバンテージになるだろう。個人的には弊社でもこういう訓練を入社直後のオリエンテーションで試してもらいたいと真剣に考えている。それほどこの施策はすばらしいと思う。

■最後に

社会は凄いスピードで変化しており、求められる仕事のアウトプットの形はどんどん変化しているし、そのスピードも速くなってきていることは間違いない。よって新人といつても昔ほど手厚いOJTを受けにく

い環境になつていると感じている。よつて学生は入社後ゆつくりと受身で成長していけるといふことは無いし、自らスタートダッシュを切つて能動的に動き、周りとの競争に勝つていかなければいけない社会に放り込まれるのである。そう考えると、この明専スクールという施策は大学と企業の間を渡る学生の強靱な橋梁となるものであり、先生とOB・OGというまさにこれ以上無い布陣で進めている一人のメンバーとして関わっていることは、本当にありがたいと思う。また、毎回自分自身も先輩や講師の方々、先生、メンバーの方々、そして今時の学生からも学ぶことが沢山あり、私個人のスキルアップの場としても貴重な時間をいただいで感謝している。

最後に、このスクールの立ち上げからご尽力され、素晴らしい施策に昇華された納富先輩が、今年度でその役を退任されるということである。この場をお借りして納富先輩に感謝の意を表すると共に、私もこの素晴らしい取り組みを後輩たちのために、今後でもできる限り尽力していきたいと思う。

（株本田技術研究所四輪R&Dセンター）